

巻頭言

「音から隔てられるということ」

理事長 新谷 友良

「音から隔てられて」という、難聴者の世界では有名な本があります。その本の「まえがき」には、「聴覚障害はすぐれて社会的な障害である。極言すれば、視力障害者や肢体障害者は、一人きりでいる時でも障害者であろうが、聴覚障害者は一人きりでいる時は障害者でないとさえいえるようなところがある。聴覚障害者の苦悩はそこから始まり、究極はそこに帰する。」と書かれています。

コロナ感染禍、「聞くこと・話すこと」から隔てられる状態が1年以上続いています。そんな中で、アメリカの神経科学者の書いた「<脳と文明の暗号>—言語と音楽、驚異の起源」（ハヤカワ文庫NF ハヤカワ・ノンフィクション文庫）を読みました。その本では、「ヒトは生まれつき言語の本能が組み込まれた脳を持っているというより、自然界を真似ることで、すでに備わっている能力を活用しているのではないか」という仮説が出されています。

言語、とくに話し言葉は自然界にある固体の「ぶつかる（衝突）音」、「すべる（摩擦）音」、「鳴る（共鳴）音」を基礎として作り上げられ、文化がそれを研ぎすまして、地域性を帯びた言語を生み出してきたのではないか、と言っています。

また、音楽は「リズム」・「音の高低」・「音の大きさ」といった要素からできていますが、音楽を特徴づけるのは、音の高低（メロディー）ではなくリズムで、心臓の鼓動、呼吸、足音などの人体の動きに伴う音、とくに足音のリズムが決定的な要素として挙げられていて、「ボールなど固体は、停止するときリズムが早くなるが、ヒトは逆に止まるときにリズムがゆっくりになる。ヒトの止まるとき足音を真似て、音楽も終わるときにリズムがスローダウンする」という例が挙げられています。

これだけの説明では、納得がいかないところが多々ありますが、周りとの会話が取り上げられてしまって「音から隔てられる」コロナ感染禍の毎日、聴覚障害者は一人きりでいるときもやはり障害者ではないか、という不安を強く感じています。

自然界にある物が作り出す音や人体の動作が言語や音楽を生み出してきたことが事実なら、コロナ感染禍の閉塞状況も必ず一過性のものと確信できます。今回の読書は自分の現在の状態を少し離れて眺めることができる格好の材料となった気がしています。